高性能シャシーを作るための“1”の前の“0”

414Xができあがる以前のシャシー404X、そしてプロトタイプ、これらのシャシーにはどのような役割があったのだろうか、24時間耐久レース仕様車とあわせて、開発シャシーの方向性や、それが必要だった理由などを探ってみることにしよう

TRF404X

「タミヤが2ベルトシャシーを作った」と突然、インターネットなどで話題になったマシン、それが404X。日本国アリーナで行われたリーディーレースで初任選手が駆ったマシンでもある

企画開発部・安井氏が語るTRF414

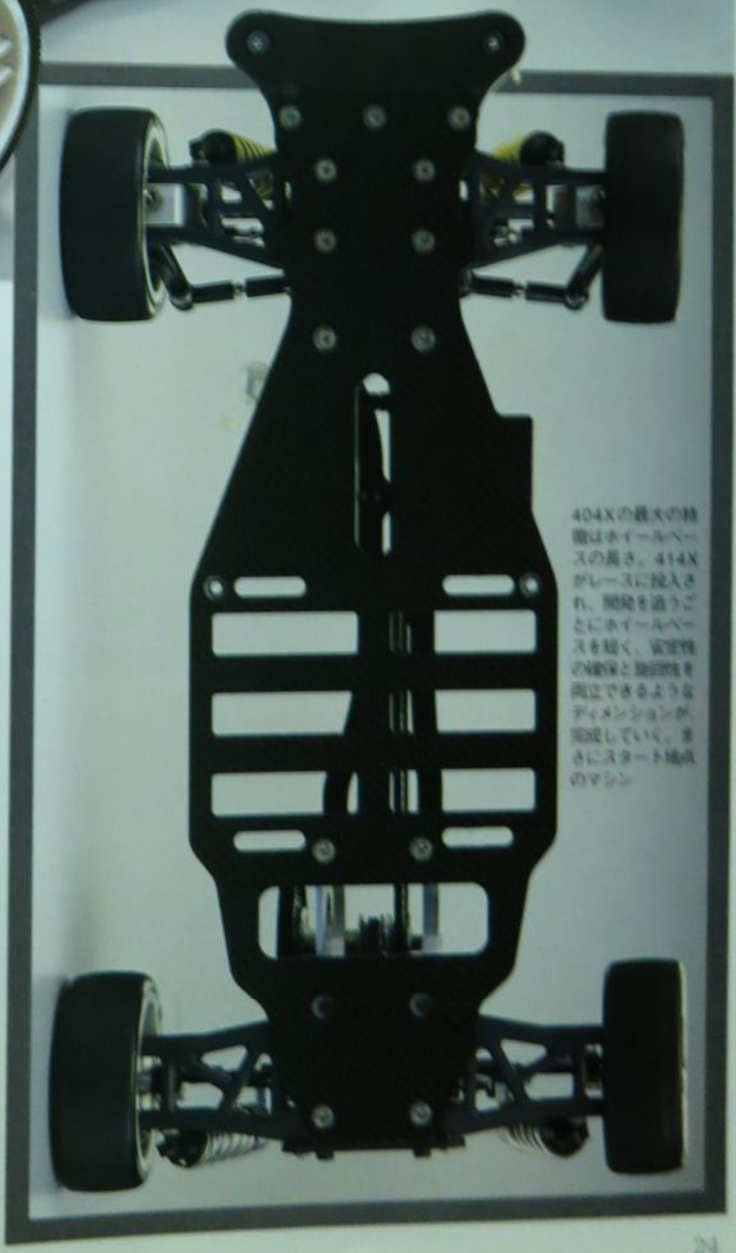
日本のサーキットはアメリカとは違います。だからタミヤではこういった競技専用シャシーは、各地域で同じ物にせず、地域に合わせたものとしたいです。そのために国内の各ビッグレースに出場し、実戦データを集めて414を完成させました。ですから日本のユーザーが望むもの、欲しい性能がすぐに引き出せるよう設計、製作してあるというわけです。みなさん、このシャシーを使ってレースを存分に楽しんでください。

手探り状態だった404Xのアライメント。それゆえ「マウント穴」はいくつもある

414Xに比べてフロントダンパーステーは多少後方に寝かせた状態となる404X

様々な足まわりのセットが試されただけでなく、24時間でパーツの耐久性もチェック

24時間耐久仕様のリヤダンパーまわり。アームの取りつけ位置が異っている



404Xの最大の特徴はホイールベースの長さ。414Xがレースに投入され、開発を進うごとにホイールベースを短く、安定性の確保と旋回性を両立できるようなディメンションが、完成していく。まさにスタート地点のマシン